映像を通して、これからの芸術表現、メディア環境を含めた社会のあり方について、考える場を提供するイメージフォーラム・フェスティバル。国内外の優れた最先端の映像作品の上映、映像作家やキュレーターとの対話やレクチャーを通して、より多くの人に映像を近く・深く触れる機会を創出します。

100年以上に亘って特段の疑念もなく続いてきた文化的行為=「映画上映」。近年急激に変容してきたメディア環境に加え、折しも突如として勃発した疫病の流行が、これまでの映像環境の在り方を決定的に変えてしまうかもしれない状況にあります。閉じた暗闇の中、複数人でスクリーンに投射された光の影を見つめるという映画=シネマというシステムは、ついに過去のものとなるのでしょうか。あるいは、我々は上映という行為に改めて新たな意味を見出していくことになるのでしょうか。まずは上映してみて考えよう。現在可能な最善の形で。
今年のイメージフォーラム・フェスティバルでは「上映するという行為」にフォーカスし、その現在的な意義について考察します。

		9/26 [sat]	9/27 [sun]	9/28 [mon]	9/29 [tue]	9/30 [wed]	10/1 [thu]	10/2 [fri]
シアター・イメージフォーラム 1F	11:00	A 東アジアコンペティション1 83分	D 東アジアコンペティション4 78分	K1 日本実験映画史1 80分	L1 日没の印象 70分	G0 いかにして私はエヴァ・ラスに 74分	E 東アジアコンペティション5 78分	B 東アジアコンペティション2 86分
	13:15	G2 オールド・ジョイ 73分+トーク	E 東アジアコンペティション5 78分	G6 私の舌は回らない 92分	L2 草の影を刈る 200分	J 東南アジアエキスペリメンタル傑作選 75分	A 東アジアコンペティション1 83分	C 東アジアコンペティション3 80分
	15:45	B 東アジアコンペティション2 86分	I ペーター・チェルカススキー 86分	G5 SpiceFilms 56分		K1 日本実験映画史1 80分	F 東アジアコンペティション6 115分	D 東アジアコンペティション4 78分
	18:30	C 東アジアコンペティション3 80分	F 東アジアコンペティション6 115分	H3 マリー・ロジエ3 75分	L3 15日間 90分	G3 ミークス・カット・オフ 109分	G5 SpiceFilms 56分	G3 ミークス・カット・オフ 109分
	21:15	G0 いかにして私はエヴァ・ラスに 74分	G1 リバー・オブ・グラス 76分	J 東南アジアエキスペリメンタル傑作選 75分	G7 あの夏 80分	G4 美麗少年 63分	G6 私の舌は回らない 92分	G7 あの夏 80分

イメージフォーラム3F「寺山修司」

9/26 [sat]
16:00 シンポジウム1
18:00 シンポジウム2

9/30 [wed]
11:00 風の積分

入場料（消費税込）

■スパイラルホール／シアター・イメージフォーラム

一般1,500円／学生800円／イメージフォーラム会員1,200円
※10月2日（金）LIVE上映『メトロポリス』（スパイラルホール）は2,800円均一料金

シアター・イメージフォーラムは全席指定。9月10日より会期中の全ての回のチケットを、シアター・イメージフォーラムのオンラインチケット購入サイト、または劇場窓口で販売します。当日受付は各日10:00より開始いたします。

スパイラルホールは自由席、整理番号制。当日販売のほか、整理番号付きの日時指定鑑賞券をチケットぴあで9月10日より発売します。
チケットぴあ　https://w.pia.jp/t/imageforumfestival/　Pコード 551-218
当日受付は各日10:10より開始いたします。

■イメージフォーラム3F「寺山修司」

［シンポジウム］　一般700円／学生・イメージフォーラム会員500円
［上映『風の積分』］　一般1,500円／学生800円／イメージフォーラム会員1,200円
※若干の上映作品の変更、上映順、上映フォーマットの変更が生じる場合があります。予めご了承ください。

		10/2 [fri]	10/3 [sat]	10/4 [sun]
スパイラルホール SP	11:00		H3 マリー・ロジエ3 75分	G8 イリュージョニスト 80分+トーク
	13:00		H2 マリー・ロジエ2 73分	13:30 LIVE 2 エスペランサ・コヤード
	15:00		G2 オールド・ジョイ 73分	LIVE 3 村上賢司
	17:00	K2 日本実験映画史2 68分	H1 マリー・ロジエ1 74分	LIVE 4 ヘルガ・ファンデール
	19:00	LIVE 1 メトロポリス 94分	トーク「映画を作り続けるために」60分	18:30 授賞式 受賞作品上映 上映時間未定

※トークセッション「映画を作り続けるために」の詳細はHPをご覧ください
（ゲスト予定:真利子哲也、吉開菜央 他）

イメージフォーラム・フェスティバル2020会場での新型コロナウィルス感染症予防のための対策について

・出入り口にアルコール消毒液を設置しております。
・スタッフはマスクを着用して対応させていただきます。
・エレベーターやドアなど多くの人が触れる場所については、消毒および清掃を行います。
・会場内の適切な換気を行います。
・シアター・イメージフォーラムは1/2、スパイラルホールは1/3に定員を制限しています。

ご来場のお客様へのお願い

・発熱（37.5℃以上）や風邪症状（咳・のどの痛み）などがある方、ご体調の優れない方はご来場をご遠慮いただけますようお願いいたします。
・ご来場時はマスクの着用（咳エチケット）、手指の消毒をお願いいたします。
・ご来場時に、非接触の体温計にて体温測定をさせていただきます。
・混雑時には入場制限を行う場合があります。
・体調が悪くなられた場合は、すぐにスタッフまでお申し出ください。
・会場での感染発生時の来場者追跡のため、当日券をお求めの方はご入場時のご連絡先記入にご協力ください。
（スパイラルホール）

イメージフォーラム・フェスティバル2020事務局
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-10-2
TEL. 03-5766-0116
www.imageforumfestival.com

EXPERIMENTAL FILM / VIDEO
映像アートの祭典

イメージフォーラム・フェスティバル2020

34th IMAGE FORUM FESTIVAL

イラストレーション:近田春夫

テーマ "オン・スクリーン" 上映について

TOKYO
シアター・イメージフォーラム
9.26（SAT）— 10.2（FRI）
スパイラルホール
10.2（FRI）— 10.4（SUN）

主催：イメージフォーラム
共催：株式会社ワコールアートセンター
協賛：株式会社ダゲレオ出版
助成：芸術文化振興基金、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
協力：アンスティチュ・フランセ日本、オーストリア大使館／オーストリア文化フォーラム、ゲーテ・インスティトゥート東京、スペイン大使館、渋谷東急REIホテル

34th IMAGE FORUM FESTIVAL East Asian Experimental Competition

東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション

「東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション」は日本、中国、香港、台湾、韓国の東アジア地域を対象とした公募部門であり、同地域出身または在住の作家による2019年以降に制作された作品を対象としている。本年は世界的な新型コロナウィルス流行で映画、映像分野にも大きな影響があったが、最終的に462件と昨年を上回る応募があり、ドキュメンタリー、アニメーション、実験映画など、多種多様な東アジアの「今」を映し出す25作品がノミネートされた。
10月4日にスパイラルホールで行われる授賞式で入賞5作品と観客賞を発表。

最終審査員

ヴェロニカ・ウォン
（大館現代美術館キュレーター／香港）

真利子哲也
（映画監督／日本）

吉開菜央
（映像作家、振付師、ダンサー／日本）

photo by Natsuki Kuroda

授賞式　10月4日（日）18:30

大賞 / 1点	賞金30万円、賞状
寺山修司賞 / 1点	賞金10万円、賞状
優秀賞 / 3点	賞金3万円、賞状
観客賞 / 1点	賞状

A 東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション1
5作品83分

IF 9/26 11:00
IF 10/1 13:15

TSUKURIME　日本

手島亜矢子／デジタル／12分／2020
「失明するかもしれないけれど、今を存分に楽しむことにした」。朝靄の住宅地を撮ったオープニングショットに衝撃。視覚に進行性の病を抱える作者は、手芸や食材を使って自らの視界を再現し“今”を語りだす。withコロナの時代、世界中が罹患を自覚して病との共生を模索している。“難病もの映画”とは一線を画すpoint of view!

震える壁.　台湾

ツェン・ユーチン／デジタル／10分／2019
連続する日常的な断片が物語を想像させる。どんちゃん騒ぎの後だろうか。空いた酒瓶や缶ビールが乱立し、20人近くはいると思われる若い男女が一室で重なり合うようにして雑魚寝している。モゾモゾと手足だけを動かしている者もいる。目を覚ました男女が抱擁し合うが、女の表情は疲れ果てているかのようで虚空を見つめている…。その視線の先には?

差異と反復とコーヒー　日本

工藤雅／デジタル／5分／2020
小さな喫茶店の一日を、グルグルと回転させながら描いた、鉛筆画によるアニメーション作品。カメラがパン回転しているため、画面に映し出されるのは常に店内の一部分のみ。それを利用し、カット割りや早送りのような処理をすることなく、時間を操作している点が見事。キャラクターの可愛らしさやユーモアも魅力の一つとなっている。

生きる壁　日本

黒坂圭太／デジタル／6分／2020
近年、ドローイング・アニメ作品を発表している黒坂圭太の新作。「生きる壁」とそれに引き寄せられて乗り越えていく若い息吹の動きを描いているが、横たわる大木や瀕死の怪獣のようにも見える「生きる壁」の形状変化は、その緻密で奔放なタッチによるドローイングと微かに聞こえる声の響きによって、想像力の自由な羽ばたきを喚起して魅力的である。

盗賊にも仁義あり　中国

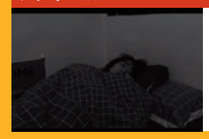
マー・ランホア／デジタル／50分／2019
その政治的な腐敗と興亡が数多くの映画や演劇の題材にされる、明王朝末期の中国。この映画のベースとなった「四人の盗賊が張氏宅で大暴れして正義を貫くこと」は啓発的な世界を標榜して1620年に出版された。4世紀前の支配世界にアナーキーな立場で反旗を挙げた4人の盗賊たちを主人公に、9シーンのサイレント映画タッチで蘇えらせた実験的な手法による一編。

B 東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション2
4作品86分

IF 9/26 15:45
IF 10/2 11:00

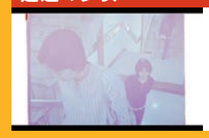
細胞とガラス　日本

林勇気 × 京都大学iPS細胞研究所(CiRA)／デジタル／9分／2020
臓器移植の手術を受けたガラス工芸作家の声がかぶさり、彼が見たガラスのカタチと細胞のカタチをめぐって大胆な発想から生まれた物語が展開する。源を景色から発想する作者のライフワークとiPS細胞の研究員とのコラボで、一致した何かの事柄を見つけ出す試みでもある。ガラス窓は主人を知らない。細胞も主人を知らないと解釈するのも一興か。

メンソール　韓国

ユ・チェ／デジタル／3分／2019
深夜、前触れ無く訪れる根拠のない不安、焦燥感。最初微かだったそれは肥大化し、自立し、やがて誰かの声で私に語り始める。ワンルームの日常、そこに生じた微かで不穏なひび割れから、次第に滲み出す濃密な闇の気配。モノクローム写真を連続して映し出す「フォトロマン」手法によって、存在しない物語への予感と不安が描かれる。

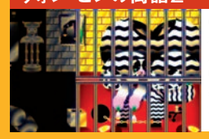
DOGHEAD　日本

竹之下桃／デジタル／5分／2020
犬の頭で出来た謎の星と、そこに降りたった人間の運命を描く、デジタル作画による2Dアニメーション作品。もろ出し出産シーンからはじまり、首が吹き飛ぶシーン、船内セックスシーンを経て、星に到着。後半、「一体どうなってしまうのだろう」と思わせてからのダンスシーンが素晴らしく、まるで、食べてはいけないものを食べた日の悪夢のよう。

延辺の少女　中国

王虹／デジタル／69分／2019
中国東北部の朝鮮族に生まれた作者が延辺、ソウル、東京と場所を移しつつ、母親との関係やセクシャリティについて心情を吐露していく。時にはフィクションシーンや恋人と撮影した8ミリフィルムなども挿入され、表現者になると宣言し、映像と格闘する作者の姿が初々しい。荒削りだが、映画を通して何かを表現したいという思いがあふれる意欲作。

C 東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション3
5作品80分

IF 9/26 18:30
IF 10/2 13:15

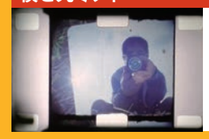
ウォン・ピンの寓話2　香港

ウォン・ピン／デジタル／13分／2019
ポップな色使いとローテクな電子音で肥大化する欲望を描き、映画祭/美術展を越境するウォン・ピン。「寓話1」に続く2作目は2つのストーリーからなるディストピア的世界のCGアニメーション。民主化デモ、新型コロナ禍、国家安全維持法施行など激動が続く香港で培われたシニカルな寓意とグロテスクなユーモア。子供向け、とは本人の弁。

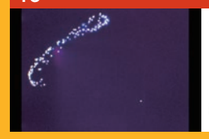
柄杓　香港

クワン・チェクワイ／デジタル／17分／2019
老人と子供が海辺で出会う。子供は海水をすくい、砂浜に掘られた穴に注ぐ。神の視線のメタファーだろうか、謎のような冒頭シーンから一貫してドローンを使った俯瞰の視点で描かれている。やがてカメラは海から山へと移動。緊張感のある1カット映像が観客の視線を捕え続ける。ミニマルな手法と謎を謎のまま提示する大胆な構成が深い印象を残す。

いちご飴　中国

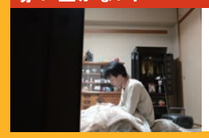
李念澤／デジタル／7分／2020
幼女の話し言葉と水彩の絵柄の絶妙なコンビネーションで綴られる。伝統的な絵本の形式を踏襲しながらも、しかしここで語られるのは心温まる物語とはちょっと違っている。お爺さんに性的な暴力を受けた…。誰にも言えないその秘密は、現実と夢の境界が判然としない幼女には、いつかテレビで見たクマの縫ぐるみとウサギとゾンビの格闘に変貌する。

僕と九ミリ半　日本

奥山順市／デジタル／32分／2019
1923年にフランスで発売された9.5ミリ・カメラ「パテ・ベビー」が翌年に日本で販売されると「くみりはん」という愛称で人気を博し、戦前期の小型映画の流行をみた。そんな昔の9.5ミリフィルムへの想いを、フィルムというマテリアルにこだわって実験映像を製作してきた奥山順市がさまざまな視点と仕掛けから問いかけて実験した刺激的な世界である。

13　日本

磯部真也／デジタル／11分／2020
13秒間隔のインターバル撮影、多重露光、天体の定点観測、16ミリフィルム、そして30代の半分を占める5年の時間。21世紀のヘリオグラフィーという、美しい時代錯誤だというべきか。歴史となった光の詩学を顕在化する、孤独な太陽礼拝というべきか。意識を失う瞬間と意識が戻る瞬間が交差するような、作品中盤の色と音が忘れられない。

D 東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション4
5作品78分

IF 9/27 11:00
IF 10/2 15:45

赤い玉がない!　日本

山口健太／デジタル／19分／2020
「俺」が夜遅く帰宅しシャワーして全裸で出てきても、悪友「松田」の冷静さにムカついて朝から八つ当たりしても「ママ」は全然平気だ。大イビキをかいて爆睡するわ、仏間で上機嫌でダンスするわ。比べて「俺」は何にイラついてる?! 映画男子の妄想はそんな愛すべき母と腐れ縁のシネ友とを巻き込んで「赤い玉」と化し脳内でバクハツする。

毛　日本

山本翔／デジタル／17分／2019
醜い容姿の男が虐げられ、恋した女に裏切られ、絶望の果てに神の姿を求める。よくある古典的な話だが! よくもここまで「醜さ」を入念に描ききったな、とその執念に感服する。とりわけ中盤のキスシーンは超ド級のエグさである。作者は醜い登場人物4人の人格をマックスまで増幅させたところで真逆の純粋な神を立ちあがらせる。その神はアートか?

答えのない電話　韓国

イ・セウン／デジタル／6分／2020
さまざまな画法を組み合わせつつ、“アンドレ・ブルトンによるエッシャー絵”のような独特の世界観を持つアニメーション作品。歪んだパースのような立方体としての建造物の遠景から、その内に棲む人々の点景がクローズアップされる。そしてそれらの人物の現実＝幻想＝妄想（口から迸るインク、家であり大洋でもある建造物、文字に侵食される建造物etc）が交錯し膨張していく。

白露　中国

チェン・シー ＋ アン・フー／デジタル／5分／2019
移り気な男が女の寝室を渡り歩く。しかし奇妙なことにどの部屋も同じ造り。外は宇宙のような漆黒の闇。気づくと小窓から一部始終を覗いていたこちらの立ち位置までもわからなくなる。ここは月の満ち欠け両方の見られる場所、陰と陽の交わるところか。画面の微かな点滅がチリチリとしたノイズと古琴の響きに相乗し戦慄と悦楽がループする。

11,565キロ・プロジェクト　中国

ベイチェン・チャン／デジタル／31分／2019
2019年、ペンシルベニア大学考古学人類学博物館で展示された古代中国の石棺に喚起され、その遺物が発掘された山東省までの地理的（米国東部から青島、遼東半島経て発掘現場へ）、時間的（近現代史から古代史へ）道程を遡行する静謐な現風景に彩られたイメージの旅。

E 東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション5
5作品78分

IF 9/27 13:15
IF 10/1 11:00

ピンク・マオ　中国

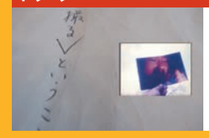
タン・ハン／デジタル／22分／2020
毛沢東の肖像が描かれた百元紙幣は一般的には赤と認識されているが、実際にはピンクではないのかという素朴な疑問に始まり、公式文書での定義、パソコンによる色彩解析、中国伝統文化における赤、共産主義の象徴としての赤へと探求は続き、ピンク色がになってきた歴史・政治・文化的文脈と交差させ、毛沢東というイコンをながめる。

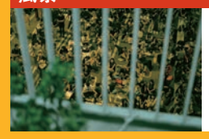
I AM NOT HERE　日本

KURiO／デジタル／9分／2019
古い雑誌、テレビ、スナックの包装紙…。一見明朗なメディアに現れる日常的なイメージの数々が、突然グロテスクな悪夢に変容する。それは作者の不安の現出であった筈が、とめどなく世界を覆い尽くす様はどこか楽しげでもある。アナログ的な肌触りを残しつつ、確かなテクニックで構成されるクレイジー&キュートなコラージュ・アニメーション。

無住の地.　台湾

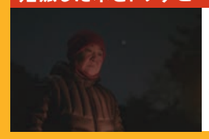
ツェン・ユーチン／デジタル／10分／2020
闇夜。街灯に照らされて若い男や女が背中を向けてひとり佇んでいる。蛾のように飛び交う白い影が画面を横切り、その小さな影は灯に照らされて一面を浮遊している。虫の鳴き声、遠くを通る車やバイクの走行音が聞こえることはあるが、静寂の中、男や女はただただ無言で下を向く。そうしたショットの集積だけで成立させたミニマル風景映画の快作。

トシ シ　日本

大木裕之／デジタル／12分／2020
札幌文化芸術交流センターSCARTSの西2丁目地下歩道映像制作プロジェクトとして制作した作品。本来は4台のプロジェクターによる12mの横長のスクリーンで上映された。形式的な実験に回収されないのは、作者の作品世界を貫く生きることと等価をなす制作の執拗さだ。光と記憶の点滅、増幅された言葉の美しさと強さ。都市と年と詩とひとときと。あゝ、ひとよ。

風景　香港

イップ・ユック=ユー／デジタル／25分／2020
2014年から2019年までの香港の断片的な記録。雨傘運動や抗議デモなど、マスメディアの報ずる現場の前後にある、変哲もない日常と不穏な空気が入り混ざる風景を眺めた。繰り返して挿入された海、風、人の流れから、ふっとジョシュア・ウォンの言葉を思い出した。「希望があるから継続するのではなく、継続することで希望が見えてくる」。

F 東アジア・エクスペリメンタル・コンペティション6
1作品115分

IF 9/27 18:30
IF 10/1 15:45

妊娠した木とトッケビ　韓国

キム・ドンリョン ＋ パク・キョンテ／デジタル／115分／2019
取り壊された米軍基地、隣接の歓楽街もまた廃墟と化しつつある。元米軍慰安婦のパク・インスンは、生きるために自らをフォークロアの中に埋没させて行く。現実か虚構かはもはや意味を持たない、ただ彼女の世界の物語。ドキュメンタリーとファンタジーを融合させ、苦悩を背負って生きる女性の内面に寄り添い、今までにない視点で慰安婦を描いている。

East Asian Experimental Competition

Experimental Panorama

特集：“オン・スクリーン” 上映について

G0 いかにして私はエヴァ・ラスに恋をしたか
1作品74分

IF 9/26 21:15
IF 9/30 11:00

サラエヴォにある映画館の映写室に住む老女セーナ。映画館にかかる白黒のフィルムと、居住空間に響き渡る音響が、彼女の記憶を刺激するIFF2019で『時間の木』が話題となったアンドレ・ジル・マタの観察ドキュメンタリー。
古びた映写機を掃除し、コーヒーを淹れることからセーナの一日は始まる。彼女が住みついている映写室には、キッチンもダイニングテーブルもある。時々、友人たちが彼女を訪れる。スクリーンにしばしば映されるのがセルビア人女優エヴァ・ラス。旧東欧圏を象徴する映画スターだ。ユーゴスラヴィアがかつて掲げた理想、そしてその崩壊の過程で生じた惨たらしい暴力ー。共和国の苦い結末への想いが交錯する。

いかにして私はエヴァ・ラスに恋をしたか　アンドレ・ジル・マタ／デジタル／74分／2016（ポルトガル・ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ）

スクリーニング・コレクティブ新世代

“上映すること”でさらに濃く映画と関わる。上映は、遊び／アクティビズム／コミュニティー作り／パーティー／勉強だ。現在活発に刺激的な上映活動を行うインディペンデントのオルガナイザーたちが集まり、いま観たい／上映すべき作品をプログラム。インディペンデント上映のこれからについて考えるシンポジウムも開催。
参加団体:グッチーズ・フリースクール、ノーマルスクリーン、SpiceFilms、イスラーム映画祭、肌蹴る光線、New Neighbors

G1 スクリーニング・コレクティブ新世代：“グッチーズ・フリースクール”1
1作品76分

IF 9/27 21:15

カンヌ・ヴェネチア・ベルリンをはじめ国際的に評価され、アメリカ映画界において独自の地位を築いている映画監督ケリー・ライカート。なぜかこれまでほぼ日本で作品が紹介されてこなかった彼女の作品に初めてスポットライトを当てる。ライカートの思春期の経験をベースに、故郷の南フロリダにて16ミリフィルムで撮られたデビュー作。
バーで出会った男と逃避行することになる孤独な主婦。“テレンス・マリックの『地獄の逃避行』に恋い焦がれて”作ったという“ロードの無いロード・ムービー、愛の無いラブ・ストーリー、犯罪の無い犯罪映画”（ライカート）。

リバー・オブ・グラス　ケリー・ライカート／デジタル／76分／1994（アメリカ）

G2 スクリーニング・コレクティブ新世代：“グッチーズ・フリースクール”2
1作品73分

IF 9/26 13:15
SP 10/3 15:00

ウィル・オールダム（ボニー・プリンス・ビリー）の出演とヨ・ラ・テンゴによるサウンドトラックで、日本でも上映の要望の多かった長編2作目。
故郷で妻と暮らし、もうすぐ父親になるマークは街に戻った旧友カートから電話を受け取る。久しぶりに再会した二人は、温泉を探して山へと入って行った…。ライカートの評価を一躍高めた超低予算映画。ウィル・オールダム演じるヴァガボンド的な友人と森の奥でしばし過ごす、居心地の悪さと風通しの良さが同居する不思議な時間。

オールド・ジョイ　ケリー・ライカート／デジタル／73分／2006（アメリカ）
*9/26（土）13:15の回、ケリー・ライカートによるティーチ・イン有り

G3 スクリーニング・コレクティブ新世代：“グッチーズ・フリースクール”3
1作品103分

IF 9/30 18:30
IF 10/2 18:30

西部劇を新たな視点で再構築し、現在でも評価の高いライカートの意欲作。オレゴンの広大な砂漠の風景に着想を得て生まれたヴェネチア映画祭SIGNIS賞受賞作品。
カスケード山脈越えを目指し、ガイドを信じて近道を進むことになった三家族。道に迷った彼らを襲うのは、空腹と飢え、そして互いへの不信だった…。

ミークス・カットオフ　ケリー・ライカート　出演:ミシェル・ウィリアムズ、ゾーイ・カザン、ポール・ダノ／デジタル／103分／2010（アメリカ）

G4 スクリーニング・コレクティブ新世代：“ノーマルスクリーン”
1作品63分

IF 9/30 21:15

2018年末に51歳で逝去したミッキー・チェン監督による台湾ゲイ・ドキュメンタリーのクラシック。
1990年代後半の台北で、ゲイの少年たちのリアルを鮮やかにとらえた作品。留学を機に恋人と別れる決心をした小羽、家族の協力を得ながら女装パフォーマンスをする小丙などの青春に手持ちカメラが接近しまっすぐと見つめる。
協力:認定NPO法人 山形国際ドキュメンタリー映画祭

美麗少年　ミッキー・チェン／デジタル／63分／1998（台湾）

G5 スクリーニング・コレクティブ新世代: “SpiceFilms”
12作品56分

IF 9/28 15:45
IF 10/1 18:30

8ミリフィルムは現役の映像メディアだ!　若手からベテランまで様々な映像作家が手がけた8ミリ作品集。
2012年に国産8ミリフィルムの製造は終了したが、その火が消えることはなかった。SpiceFilmsによる新作8ミリ上映企画「!8 exclamation-8」は過去10年間に渡り、現像ワークショップなどの取り組みと並行し、8ミリフィルムの「新作」を上映し続けてきた。イメージフォーラム・フェスティバル2018で優秀賞を受賞した『愛讃讃』、七里圭監督作品『あなたはわたしじゃない』のスピンオフ作品『透馬のこと』など10年間の傑作選12作品を上映。

8ミリプログラム
新しい夜　清成晋太郎/8ミリ/3分/2011（日本）
For Life 三部作「梅」「竹」「松」
新井潤峰/8ミリ/9分/2012（日本）
影をなめすと　日景明夫/8ミリ/5分/2012（日本）
瞬息10　水由章/8ミリ/3分/2012（日本）
Park 4 nicole　新宅謙吾/8ミリ/3分/2014（日本）
愛讃讃　池添俊/デジタル/8分/2018（日本）
黒い夢　斎藤英理/8ミリ/4分/2018（日本）
さよならは私が覗く　宮川真一/8ミリ/10分/2018（日本）
透馬のこと　七里圭/8ミリ/3分/2018（日本）
Signify　石川亮/8ミリ/5分/2019（日本）
EGGS　飯嶋桃代/8ミリ/3分/2020（日本）

インスタレーション
Zoom in out　南 俊輔/ミクストメディア/2018（日本）　※10月2日〜4日　スパイラルホールで展示

Signify

G6 スクリーニング・コレクティブ新世代：“イスラーム映画祭”
1作品92分

IF 9/28 13:15
IF 10/1 21:15

移民とは。ルーツとは…。あるトルコ系家族の日常生活と記憶のドキュメント。映画が生まれる原動力は、監督のアイデンティティーを巡る問いだった。
ベルリンに住むトルコ系移民の監督。両親の出身地であるアナトリアにカメラを持って旅に出る。自分のルーツがクルドであることを初めて知った彼女は、自身のクルドートルコードイツという3つに絡みあうアイデンディティーを探るため、家族にカメラを向ける。

私の舌は回らない　セルビル・トゥルハン／デジタル／92分／2013（ドイツ）

G7 スクリーニング・コレクティブ新世代：“肌蹴る光線”
1作品80分

IF 9/29 21:15
IF 10/2 21:15

メイスルズ兄弟によるカルト・ドキュメンタリー『グレイ・ガーデンズ』（1975）が生まれる発端となった写真家ピーター・ビアードの映画プロジェクト。長い間失われたとされていたその16ミリフィルムが近年発見され、本作品が生まれた。
1972年の夏、写真家ピーター・ビアードは友人のリー・ラジヴィルと一緒に彼女の親戚のグレイ・ガーデンズのイディ・ビールズ親子を撮影した。発掘された彼女たちとの出会いの記録と、ともに過ごした家族や友人アーティストたちの映像が鮮やかに甦る。撮影はビアード、一部アンディ・ウォーホルとジョナス・メカス。

あの夏　ヨーラン・ヒューゴ・オルソン／撮影はピーター・ビアード、アンディ・ウォーホル、ジョナス・メカス／デジタル／80分／2017（スウェーデン・デンマーク・アメリカ）

G8 スクリーニング・コレクティブ新世代：“New Neighbors”
1作品80分

SP 10/4 11:00

ジャック・タチの脚本を元に『ベルヴィル・ランデブー』のシルヴァン・ショメが映画化したアニメーション。老手品師と貧しい少女の切ない交流を描く傑作。日本では2011年に公開されヒットした。

配給:クロックワークス／三鷹の森ジブリ美術館

イリュージョニスト　シルヴァン・ショメ　オリジナル脚本:ジャック・タチ／デジタル／80分／2010（イギリス・フランス）
*上映後サヌキナオヤ、畳野彩加／福富優樹（Homecomings）によるトーク有り

©2010 Django Films Illusionist Ltd/Cine B/France 3 Cinema All Rights Reserved.

Live Program

オン・スクリーン：LIVE

映画は複製可能な芸術である。しかし、上映そのものは一回一回違うものだ。会場にいる観客も違えば、観る者の気分も違う。フィルムの状態も、映写機の調子も異なる。映画上映は本質的には一回性のものなのだ。そのような<映画の一回性>に着目した上映パフォーマンス集。

オン・スクリーン：LIVE 1　『メトロポリス』金字塔
SP 10/2 19:00

『KUICHISAN』、『TECHNOLOGY』で彗星の如く日本映画に登場し、多くの人に衝撃を与えた映像作家・遠藤麻衣子が、音楽家・服部峻と小林七生と共に贈るフリッツ・ラングの『メトロポリス』のライブ音楽上映。現在コロナ下でドラスティックに組成変容中の東京が眠らせている都市性を改めて揺り起こす。

LIVE上映『メトロポリス』　フリッツ・ラング／16ミリ／94分／1927（ドイツ）
ライブ演奏:遠藤麻衣子<Vn.>×小林七生<Ds. Perc. Syn.>×服部峻<Syn. S.E.>

メトロポリス

我らは恐竜のみ保証する

オン・スクリーン：LIVE 2　エスペランサ・コヤード
SP 10/4 13:30

映画としての映画。ダンスとしての映画。彫刻としての映画。映写の光が空間を満たし、その場に触覚が、磁気が、気体が生まれる。映画の現象学的側面、状況的側面に着目するスペイン人アーティストによる上映パフォーマンス。

我らは恐竜のみ保証する　エスペランサ・コヤード／上映パフォーマンス（16ミリ）／約45分／2014-15（スペイン）

オン・スクリーン：LIVE 3　村上賢司
SP 10/4 15:00

撮影は自宅の窓から見える夕日にカメラを向けたことから始まり、手元にあった8ミリフィルムを全て使い切るまで続けられた。音声はフィルムに塗布された磁性体に撮影と同時に記録されたものと、カセットテープにあるものが上映時にミックスされ再生される。また時には映写技師が観客に呼びかける。これは本来のカタチから変容し、解体され続けた「映画」を再度劇場に降臨させる儀式だ。（村上賢司）

後ろに振り向け!　村上賢司／8ミリ／45分／2017（日本）

後ろに振り向け!

星座

オン・スクリーン：LIVE 4　ヘルガ・ファンデール
SP 10/4 17:00

撮りためた無編集のフィルム・ロールを、その時々の順番と組み合わせで自ら映写して、その都度異なるライブ上映を行うヘルガ・ファンデール。上映の一回性と、観客と作り手との距離を模索し、親密なスクリーニング体験を創出する。ルーブル美術館やポンピドゥーセンターに作品が収蔵されるドイツ人アーティストの作品を日本初上映。

星座　ヘルガ・ファンデール／上映パフォーマンス（8ミリ+16ミリ）／約40分／2020（ドイツ）

Symposium

シンポジウム　スクリーニング・コレクティブ新世代-アクティビズムとしての上映活動

シンポジウム1　観たい映画を上映する：“システムから遠く離れて”

今の映画に足りないものは何か? 観たい映画が上映されないのであれば、自分たちで上映すればいい! なかなか日本に輸入されないアメリカン・インディーの秀作を数多く紹介し、配給も手がける「Gucchi's Free School」、ジョナス・メカス作品などアート系実験映画も含めたエッジの効いたセレクションが注目の「肌蹴る光線」、これまで京都を中心に<上映+演奏+Zine制作>というコンビネーションで上映イベントを提供してきたデザイナーのサヌキナオヤとバンドHomecomingsによる「New Neighbors」が、自らの活動を紹介し、その知識と経験をシェアする。

ゲスト:降矢聡（Gucchi's Free School）×井戸沼紀美（肌蹴る光線）×サヌキナオヤ／福富優樹（New Neighbors）
日時:9月26日（土）16:00〜17:30
会場:イメージフォーラム3F「寺山修司」

シンポジウム2　上映で繋ぐ新しい回路

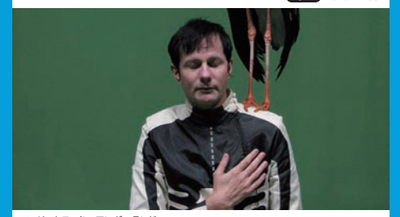
上映が生むもの。繋ぐもの。上映は時に新しいコミュニティーを生み出すプラットフォームになる。日本では馴染みが薄かったイスラーム圏の映画を紹介し、大きな成功を収めている「イスラーム映画祭」、性的マイノリティの経験を映像に捉えた実験的作品を映画館や他団体と協働して上映してきた「ノーマルスクリーン」、8ミリというアナログメディアに特化し作品上映だけでなく現像のワークショップなどを行う集団「SpiceFilms」東京・田端で日本唯一のユニバーサルシアターを運営するシネマ・チュプキ・タパタが登壇する。

藤本高之（イスラーム映画祭）×秋田祥（ノーマルスクリーン）×石川亮（SpiceFilms）×平塚千穂子（シネマ・チュプキ・タパタ）
日時:9月26日（土）18:00〜19:30
会場:イメージフォーラム3F「寺山修司」

H1 マリー・ロジエ特集：マリーのワンダーランド1

2作品74分

SP 10/3 17:00



フェリックス・イン・ワンダーランド

アメリカン・アヴァンギャルド・ミュージック＋実験映画のマッドな巨匠トニー・コンラッドXドイツの変態テクノ奇人フェリックス・クービンのポートレート2本立て。

名だたるアヴァンギャルド・アーティストのポートレートを、自らのポップでキッチュな世界観へと引き込んで築きあげ、ドキュメンタリーの常識を打ち砕く独自のフィルモグラフィーを築きあげているマリー・ロジエ。カンヌやベルリン映画祭、MoMAやポンピドゥーセンターでとり上げられる彼女の作品は、撮影自体がライブ・イベントで、アーティストとの共同パフォーマンスだ。彼女の最新作『フェリックス・イン・ワンダーランド』、IFF2008にて上映され人気を博した『ジェネシスとレディ・ジェイのバラッド』を含む3プログラムを上映する。

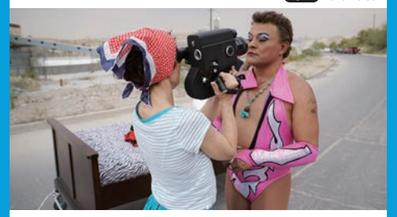
トニー・コンラッド：ドリーミニマリスト　マリー・ロジエ　出演:トニー・コンラッド／デジタル／25分／2008(アメリカ)

フェリックス・イン・ワンダーランド　マリー・ロジエ　出演:フェリックス・クービン／デジタル／49分／2019(フランス・ドイツ)

H2 マリー・ロジエ特集：マリーのワンダーランド2

1作品73分

SP 10/3 13:00



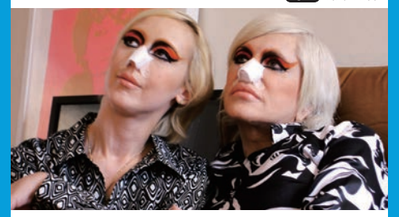
満身創痍で闘いつづける“ルチャ・リブレ界のリベラーチェ”、トランス・プロレスラーのカサンドロ。レスラーの理想的な花道とは？ 煌びやかな存在の裏に潜むメランコリーに寄り添う、親密なポートレート。

ルチャ・リブレの女王　カサンドロ　マリー・ロジエ　出演:カサンドロ／デジタル／73分／2018(フランス)

H3 マリー・ロジエ特集：マリーのワンダーランド3

1作品75分

IF 9/28 18:30
SP 10/3 11:00



愛する二人はお互いに近づくために整形を繰り返し、新しい二人で一つの人間になる。本年3月にこの世を去ったジェネシス・P・オリッジ（元スロッビング・グリッスル、サイキックTV）と、そのパートナー、レディ・ジェイの“究極のラブストーリー”を描く。

ジェネシスとレディ・ジェイのバラッド　マリー・ロジエ　出演:ジェネシス・P・オリッジ、レディ・ジェイ／デジタル／75分／2011（アメリカ・ドイツ・イギリス・オランダ・ベルギー・フランス）

I ペーター・チェルカススキー：暗室からやって来た映画（フィルム）作品たち

7作品86分

IF 9/27 15:45

アウタースペース

“ファウンド・フッテージ映画の巨匠”ペーター・チェルカススキーのフィルム作品傑作選。

サイト&サウンド誌による「オールタイム・ベスト映画」にもランクインする傑作『アウター・スペース』などのファウンド・フッテージ映画で知られるペーター・チェルカススキー。既存のフィルムのイメージとサウンドトラックを、暗室内で別のフィルムに手作業で焼き付け、元の映画とは全く別の作品を作り出す映像フロッタージュ的制作方法は唯一無二と言える。フィルムが持つ“素材感”が最大限に増幅される彼の作品群を、オリジナル・フォーマットで上映する。

マニュフラクチャー　ペーター・チェルカススキー／35ミリ／3分／1985
ハッピー＝エンド　ペーター・チェルカススキー／35ミリ／11分／1996
ショット＝カウンター・ショット　ペーター・チェルカススキー／16ミリ／22秒／1987
カミング・アトラクションズ　ペーター・チェルカススキー／35ミリ／25分／2010
完璧な身体　エクスクイジット・コーパス　ペーター・チェルカススキー／35ミリ／19分／2015
光と音のマシーンのためのインストラクション　ペーター・チェルカススキー／35ミリ／17分／2005
アウタースペース　ペーター・チェルカススキー／35ミリ／10分／1999　（オーストリア）

K1 日本実験映画史1

5作品80分

IF 9/28 11:00
IF 9/30 15:45

EMOTION = 伝説の午後・いつか見たドラキュラ

日本の実験映画黎明期1960年代の歴史的重要作品を上映。

2020年、亡くなるまで現役の映画監督として作品を発表し続けた大林宣彦の個人映画の代表作『EMOTION〜』、大林とともに初期個人映画を牽引した高林陽一の『石っころ』、世界初のCGアニメ『風雅の技法』、後に白組を率いて日本映画に多大な貢献をする島村達雄の『幻影都市』、大林、高林らとともに「フィルム・アンデパンダン」のメンバーでもあったドナルド・リチーの『猫と少年』。60年代の主要作品を紹介。

石っころ　高林陽一／8ミリ(デジタル上映)／28分／1960(日本)
猫と少年　ドナルド・リチー／16ミリ(デジタル上映)／4分／1962(日本)
EMOTION = 伝説の午後・いつか見たドラキュラ　大林宣彦／16ミリ(デジタル上映)／39分／1966〜67(日本)
幻影都市　島村達雄／35ミリ(デジタル上映)／6分／1967(日本)
風雅の技法　月尾嘉男＋山田学／16ミリ(デジタル上映)／3分／1967(日本)

I ヴィヴィッド・メモリーズ　鮮烈な夢 東南アジアエクスペリメンタル傑作選

4作品75分

IF 9/28 21:15
IF 9/30 13:15

ヴィネガー・バス

世界の映画祭で評価されている、東南アジアからやってきた今後要注目の作家たち。強力な映像の説得力に幻惑される。

同名の戦前ドイツ映画にオマージュを捧げ＜見る－見られる＞の関係をユーモラスに掘り下げた『日曜日の人びと』、身体を蟻の住処にされたゲイ男性の日常を描く『アントーマン』、統合失調症と診断された母との日々を記録した＜日記写真－映画＞作品『ビタースウィート』、重労働にあえぐ看護婦のささやかな至福の休憩時間を垣間見る、毒々しいまでにポップな『ヴィネガー・バス』。世界の映画祭を席巻する4人のアーティストたちによる最新作。

日曜日の人びと　トゥンラポップ・セーンジャルーン／デジタル／20分／2020(タイ)
アントーマン　ヴィエット・ヴー／デジタル／27分／2018(ベトナム)
ビタースウィート　ソーラブ・フラ／デジタル／14分／2019(インド)
ヴィネガー・バス　アマンダ・ネル・エウ／デジタル／14分／2018(マレーシア)

K2 日本実験映画史2

8作品68分

SP 10/2 17:00

審判

1970年代、コマ撮りや再撮影など数々の視覚の実験とともに、世界に類を見ない多様なスタイルの作品が生み出された日本実験映画黄金期を紹介。

1970年代は定期的なシネマテーク活動が始まったこともあり、新たな映像作家が続々と登場。互いに刺激し合うことで歴史に残る重要作が多く生まれた。この時期の作品は現在においても海外の映画祭、美術関係者などから注目を浴び続けている。観客がスクリーンに釘を打つ寺山修司の『審判』も特殊スクリーンで上映。

南岸沿　中島崇／8ミリ(デジタル上映)／3分／1971(日本)
スイッチバック　かわなかのぶひろ／16ミリ(デジタル上映)／9分／1976(日本)
映画・LE CINEMA　奥山順市／16ミリ(デジタル上映)／5分／1975(日本)
オランダ人の写真　居田伊佐雄／16ミリ(デジタル上映)／7分／1976(日本)
コーヒー・ブレイク　古川タク／35ミリ(デジタル上映)／3分／1977(日本)
おろち　宇田川幸洋／16ミリ(デジタル上映)／4分／1978(日本)
スティル・ムービー　永田陽一／16ミリ(デジタル上映)／3分／1978(日本)
審判　寺山修司／16ミリ／34分／1975(日本)
上映前、西嶋憲生(映像研究者)によるトーク有り

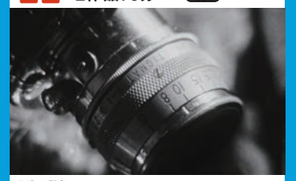
Filmmakers in focus フィルムメーカーズ・イン・フォーカス

L 鈴木志郎康：極私的映画思考

詩人でもある鈴木志郎康は、自身の身辺を撮影対象として、全くプライベートな視点から映像表現とは何かという普遍的命題に斬り込む映像作品を多数制作。個人映画の代表的作家として以後の映像分野に大きな影響を及ぼしてきた。今回の特集では、自身の映像制作について確信を得るに至った『日没の印象』から、対象を自己へと転換した日記映画の傑作『15日間』へと到る鈴木志郎康の思考の変遷をたどる。

L1 鈴木志郎康特集1

2作品70分　IF 9/29 11:00



日没の印象

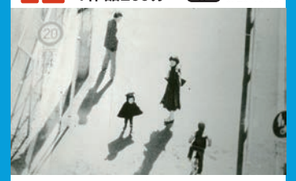
日本の個人映画史に残る鈴木志郎康の代表作と転換点。

NHKのカメラマンとして勤務する作者は古い16ミリカメラを見つけ、即座に購入する。そのカメラを使って身辺を撮影していくことで、パブリックな映像とは全く逆のプライベートな視点を発見し、自らの映像表現を開拓していくことを決意。そして『日没の印象』が誕生する。『写さない夜』では、自らのイメージを映像にしようとするが、そこにはカメラマニアとしての姿しかなかった。その後、作者は空っぽの自分を暴露すべく、『15日間』を構想していく。

日没の印象　鈴木志郎康／16ミリ(デジタル上映)／24分／1975(日本) ※英語字幕付き
写さない夜　鈴木志郎康／16ミリ／46分／1978(日本)

L2 鈴木志郎康特集2

1作品200分　IF 9/29 13:15



国立映画アーカイブにも所蔵された鈴木志郎康の日記映画の到達点。

『日没の印象』で手応えを得て、日常的な視点から表現する映像制作を発展させ、常に手元にカメラを置いて撮影することを実践した。4部で構成され、オーディオコメンタリー的につけられたナレーションで心境を振り返っていく。撮影していくにつれ撮影の動機を失った作者は生活が膠着していることに気付き、退職を決意。撮影する行為が作者の意識と実生活を変化させていく。

草の影を刈る　鈴木志郎康／16ミリ／200分／1977(日本)

L3 鈴木志郎康特集3

1作品90分　IF 9/29 18:30

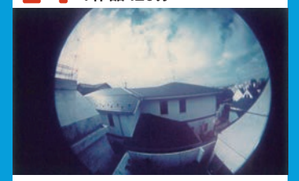
2020年のロッテルダム国際映画祭で海外初上映。自分自身を被写体にした撮影行為が映画の本質をあぶり出す。

『日没の印象』と並ぶ鈴木志郎康の代表作。毎日のできごとを15日間にわたってカメラに向かって語るという形式で制作された日記映画の極北。無人のカメラに毎日語りかける行為を繰り返すことで、撮影者と被写体との関係を再構築するとともに、作者の思考は「映画を成り立たせているものは何か」という根源的な問いへと発展していく。

15日間　鈴木志郎康／16ミリ(デジタル上映)／90分／1980(日本) ※英語字幕付き

L4 鈴木志郎康特集4

1作品420分



窓から見える空を8ミリフィルムで1年にわたり撮影した伝説的日記映画。

昭和から平成への転換期でもある1988年7月1日から翌年の6月30日まで、自宅の窓から見える空をインターバル撮影でコマ撮りした作品。『15日間』で得た、「撮影時と上映時の時間の流れの決定的なズレで映画が成り立っている」という感覚を突き詰めた究極の日記映画。「人間の文化は自然との付き合いの上に成立しているわけであるから、その付き合い方の一つとして、このような“映像作品”が存在してもいいのではないか」(鈴木志郎康)。

風の積分　鈴木志郎康／8ミリ／420分／1989(日本)

上映会場:イメージフォーラム3F「寺山修司」
9月30日(水)11:00

Installation Workshop

インスタレーション

ミニチュアと映像装置を組み合わせたインスタレーション作品を多数制作している伊藤隆介の新作。フリッツ・ラングの『メトロポリス』へのオマージュで、映画の黎明期に製作された映像装置のひとつ「キノーラ」と小型カメラを組み合わせている。『メトロポリス』に登場する女性ロボット「マリア」の行進に、テクノロジーと近代史に対する作者のユーモアを含んだ批評精神がキノーラの映像とともに重なっていく。
協力:苫小牧市美術博物館

Mは、マーチ（行進）のM　伊藤隆介／ミクストメディア、プロジェクター／2020(日本)

ワークショップ

WS1 ワークショップ：コラージュ／ファウンド・フッテージ映画入門

すでに存在する映像を引用し、新たな映像作品を制作する手法「ファウンド・フッテージ」。ポップ・アート的なコラージュから歴史的資料として引用するリサーチ・ベースの作品など、様々な表現の可能性を秘めたこの手法にフォーカスを当てたワークショップを行う。

セッション1　コラージュとファウンドフッテージ映画、その歴史　伊藤隆介(映像作家)
セッション2　国際的映像アーカイブと映像作家:協働の可能性　羽山夏子(NHKエンタープライズ)
セッション3　繊細なるクラフト:“日本映画社”のヴァーヴァル・ポリティクス　リスキー・ラズアルディ(アーティスト、ラボ・ラバラバ・メンバー)
セッション4　ファウンド・フッテージ映画のアナログ制作法　ペーター・チェルカススキー(映像作家)
※内容の変更や、オンラインでのレクチャーになる場合があります。

【日時・会場】
セッション1…9月27日(日)16:30〜18:00　イメージフォーラム3F「寺山修司」
セッション2…9月27日(日)18:30〜21:30　シアター・イメージフォーラム&イメージフォーラム3F「寺山修司」
※Iプログラム「ペーター・チェルカススキー:暗室からやって来た映画作品」上映後レクチャー
セッション3&4…9月28日(月)18:30　イメージフォーラム3F「寺山修司」

【料金】
12,000円(税込)
※Iプログラム「ペーター・チェルカススキー:暗室からやって来た映画作品」鑑賞料込み
定員:20名
※イメージフォーラム・フェスティバル2020HPよりお申し込みください。

WS2 ワークショップ：ドキュメンタリーを再発見する

独自の方法でアーティストを被写体として個性的なドキュメンタリーを制作してきたマリー・ロジエの特集上映に関連して、ドキュメンタリーの新たな可能性について考えるワークショップを開催。個人映画、日記映画、アート・ドキュメンタリーなど、各作家が持つ独自の視点を通してドキュメンタリーという表現方法の本質を探る。

独自セッション1　ポートレートの新たな可能性　中村佑子(映画監督)
セッション2　日記映画とドキュメンタリー　野村建太(映像作家)
セッション3　ドキュメンタリーはジャンルではない　村上賢司(映画監督)
セッション4　マリー・ロジエによるマリー・ロジエ　マリー・ロジエ(映像作家)
※内容の変更や、オンラインでのレクチャーになる場合があります。

【日時・会場】
セッション1…9月29日(火)19:00〜21:30　イメージフォーラム3F「寺山修司」
セッション2…9月30日(水)19:00〜21:30 イメージフォーラム3F「寺山修司」
セッション3…10月1日(木)19:00〜21:30 イメージフォーラム3F「寺山修司」
セッション4…10月3日(土)17:15〜18:30 スパイラルホール
※H1プログラム「マリー・ロジエ特集:マリーのワンダーランド1」上映後トーク

【料金】
15,000円(税込)
※H1〜H3プログラム「マリー・ロジエ特集:マリーのワンダーランド」、L1〜4プログラム「鈴木志郎康特集:極私的映画思考」鑑賞料込み
定員:20名
※イメージフォーラム・フェスティバル2020HPよりお申し込みください。

Related Screening Event

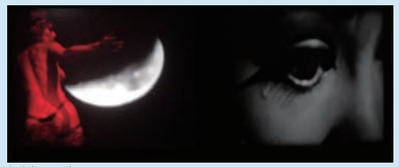
イメージフォーラム・フェスティバル2020関連上映

特集：台湾実験映画・その現在　主催：ノーマルスクリーン
日時：2020年10月3日(土)〜10月9日(金)連日21:00より
会場：シアター・イメージフォーラム

プログラム1　台湾新実験電影：ひしめきあう地盤の端のこどもたち　9作品／合計80分
キュレーション:ウー・ツィアン

プログラム2　迷い子のリボン：ウー・ツィアン自選集　8作品／合計61分

上映プログラム内容・詳細　http://normalscreen.org



伊人(イーレン)